

柏木の人間像について

— その愛と死をめぐって —

武原弘

「若菜」巻以降における柏木は、源氏物語第二部の悲劇的世界において、主人公と目されていい位置にある人物である。彼をめぐる悲劇は、垣間見から密通に至る女三宮への愛とその死までの経緯を描いた「若葉」上・下巻に鮮烈に描出されており、後の「柏木」巻は、その悲劇的な死を遂げた柏木に対して、限りない哀惜の情をもつて作者が綴った鎮魂譜なのである。

柏木の死は、まさに悲劇的としか言いようがないのであるが、彼をあのような悲劇的な死に追いやったものはほんとうは何であったか。一見、自明的であるとも思えるこの問いには、意外に重要な多くの課題が潜在しているようである。

柏木の死を凝視することによって私が捉えようとしているものは彼の生そのものである。彼の死の本質を考察することが、同時にそこから、彼の生の基底にあった悲劇的世界への逆照射を与えることではなければならない。それが、柏木という人物像の根本に関わる悲劇論となるであろう。また、そのような悲劇的人間像の造型に非常なエネルギーを注いだできた作者の理念・方法にまで考及しようとするのが、本稿での私のねらいである。

柏木の人間像について — その愛と死をめぐって —

柏木の悲劇とは、端的に、その若い日の死にあると言うことができる。しかし、それだけでは問題は少しも深まらない。問題は、柏木は何故に、どのように、いつ死んだかを、作品に即して丁寧に分析考察するところから始まる。

柏木をあのような死に至らしめたものはいったい何であろうか。今日ほぼ通説となりつつある見解は、女三宮との密通後の、柏木の源氏に対する畏怖恐懼の自己増殖によって柏木は死んだ、というものである。密通後における柏木の源氏に対する畏怖の念は、異常なまでに高まっている。恐怖が恐怖を生んでいくかのように、柏木の心は目を追って自責と恐怖の淵に沈んでいくようである。いささか本文を辿ってみよう。「さてもいみじき過しつる身かな。世にあらむ事こそ眩くなりぬれと、恐しくはづかしき心地して、ありきなどもし給はず」（日本古典全書「源氏物語」四八池田亀鑑校註）一七八頁。傍点稿者。以下も同書による。頁数のみを記す）密通直後の柏木の想念である。自責の念と源氏に対する畏怖の念とが強く現われ

ている。「この院に目をそばめられ奉らむことは、いと恐しくはづかしく覚ゆ」(二七九頁)ここでも同様であるが、「この院に」とはつきり限定している点に注目したい。やがて、女三宮の不注意から、柏木との密事が当の源氏に露頭してしまう(一九六頁)とき、柏木の源氏に対する被圧迫感・畏怖感は極限まで高まっていったようである。「はづかしくかたじけなく、かたはらいたきに、朝夕涼も無き頃なれど、身もしむる心地して、言はむ方なく覚ゆ。(中略)あさましくおほげなきものに、心置かれ奉りては、いかでかは目をも見合せ奉らむ、さりとてかき絶え、ほのめき参らざらむも人目あやしく、かの御心に思し合せむ事のみみじさ、など安からず思ふに、心地もいとなやましく、内裏へも参らず」(二〇〇頁)とあって柏木の心理的被圧迫観念は昂じて遂に肉体的病弊をひき起こしてしまっている。ここよりずっと後の叙述であるが、柏木は「春の頃はひより、例もわづらひ侍る、みだり脚病といふもの、所せく起りわづらひ侍りて、はかばかしくふみたつる事も侍らず、日頃に添へて沈み侍りしなむ、内裏などにも参らず」(二一四頁)と語っている。試案の前の源氏との対面で、柏木が源氏に無沙汰の弁解をしているところであるが、柏木は既に病んでいたのである。このような病気は、柏木の手紙が源氏の手に入ったことを小侍従から聞いた頃から、石田穰二氏の言われるように「源氏への畏怖が、いはば真の畏怖である事の、肉体を以てする證しであった」と言つてよい。やがて、有名な朱雀院五十賀の為の試案の酒宴場面がある。「過ぐる齡にそへては、酔泣こそとどめ難きわざなりけれ。衛門の督心とどめてほほゑまるる、いとど心はづかしや。さりともしばしな

らむ。さかさまにゆかぬ年月よ。老いはえのがれぬわざなり」(二一八頁)久しぶりの対面である。酔った源氏は、柏木にそう話しかけながら「うち見やり給ふ」たのであったが、この言葉が、酔いに紛れての源氏から柏木にあびせられた痛烈な皮肉であったのか、それとも、寄る年波に自己の敗北を意識した老いの愚痴であったのか——この文脈に即する限り、少くも源氏の意識は後者であったはずである。にもかかわらず、柏木にとってこの一句は、そのときの源氏の「眼光」とともに鋭い刃のような決定的な痛撃として受けとられたのである。既に、石田穰二氏、野村精一氏、深沢三千男氏らによつてすぐれた分析が施こされたように、敗北意識がもたらした源氏の愚痴が、柏木において致命的な殺意ある皮肉に転化することの不思議なくい違いが柏木の肉面的悲劇を形成していくのである。このとき柏木は「心地かき乱りて、堪へ難ければ、まだ事もはてぬに、まかで給ひ」「やがていといたくわづらひたまふ」(二一八〜一九頁)のである。この病臥から死まで、女三宮への尽きることのない愛情を抱いたまま、柏木は若い生命の残り火を燃え尽くしていくのである。

思うに、柏木と女三宮の密事を知った後もなお、源氏の柏木に対する態度は「寛容」としか言えないものの一貫している。無論、源氏は柏木事件によつてしたたかな敗北を喫したわけで、胸中やる方ない怒りがあったことは十分想像される(本文一九六〜七頁二〇〜二頁など参照)。しかし、源氏はその怒りを柏木にも女三宮にも直接爆発させることなく、むしろ寛容を以てし、表面上はこの上なく平穩無事だったのである。源氏の心中には、昔日の己が罪

業がいましじみと回想され、因果応報の理の前で彼自身立ち尽くすほかなかつたからである（一九七〜八頁）。

柏木を決定的に打ちのめした源氏に対する恐怖心は、かくて、外的には何ら原因をもたない、彼自身の内部で自己増殖された、根柢のない妄念でしかなかった。石田氏は「いわれなき恐怖のとりこになり、為に破滅して行く悲劇の人間」として柏木を評され、野村氏は「被圧迫感・脅迫観念に苦しみ、源氏の寛容とは全く正反對の恐怖感の中で呻吟する」柏木と説いておられる。両氏のご指摘を受けついで深沢氏が「絶大な権威の後光によって強化された怒りの幻影に脅やかされた不安・恐怖感を自己増殖して自ら死を招いた」人間として柏木を捉えられるところ、密通から死に至る経緯を十全に見通しての正確な柏木像が明らかになっている。

私は、このような柏木論にほぼ全面的に賛同したい。ただ、さらに徹底的に作品に即して、柏木の内面世界を深く分析する必要を覚える。それは、「柏木の扞格・葛藤は、すべて彼の内的な理想の場に於て斗はれた」とし、柏木の死もまた「彼の精神の世界の必然として起こった」とされる石田氏の視座と同じところにいて、さらに柏木の生の内面をその最深部まで追及しようとする、一つの試行である。そこには、柏木の生の根源にあるもの、彼の内界に壮大苛烈に展開された世界滅亡へのドラマの本体が、より明瞭に浮彫りされてくるはずである。

二

柏木を死に追いこんだ源氏への恐怖心が顕著になるのは、右に見

柏木の間隙について — その愛と死をめぐって —

てきたように、女三宮との密通以後においてである。しかし、より正確には、本文をさらに遡って、有名な蹴鞠の夕べの垣間見の場面

に認められるのである。このことはもっと注意されてよい。

かねてから思い慕っていた女三宮を春の夕べの簾のかけに垣間見て、柏木は思わず「うつくしの人や」と感動する（一一一頁）。その瞬間から柏木の恋の炎は、静かに、しかし、激しく燃えていた。

が、そんなときも柏木は「自らも、大臣を見奉るに、気恐しく眩くかかる心はあるべきものか、斜ならむにてだに、けしからず、人に点つかるべきふるまひはせじ、と思ふものを、ましておほけなき事と思ひわびて……」（一一九〜一〇頁）と、自らのあるまじき料簡を反省していたのである。宮との密事に至る五、六年も前の日のことである。本文はその後かなりの長きにわたって柏木に関する一切の叙述を持たない。そして、五、六年の経過後も、なお女三宮を恋慕する柏木の再登場となつて、やがてすぐ密通の場面に入るが、女三宮との密会の機会を謀るよう小侍従に迫るとき、柏木は「おほけなき心はずべて、よし見給へ、いと恐しければ、思ひ離れて侍り」（一一一頁）と言っている。

思うに柏木は、女三宮に対する恋（心）を「おほけなき事（心）」として、当初から明確に自覚していたのである。「おほけなし」は大言海によれば、「大気甚し義、大胆なりノ意」とあり、さらに「身ノ分際ニ応ゼズ。分、不相応ナリ」としている。「若菜」上・下巻と「柏木」巻とにおける「おほけなし」の用例は全部で一三例あり、そのうち柏木の女三宮に対する恋に関して用いられたものが九例。密通前で四例、後で五例あることをみても、この認識は終始一貫し

ていたとみるべきである。(さきの九例のうち、柏木自身の会話または心中描写に用いられたのが五例もあることに注意する必要がある。)これをいまの文脈において具体化してみれば、例えば「ましてこの宮は、人の御程を思ふにも、限なく心ことなる御程に、取り分きたる御気色にしもあらず、人目の飾りばかりにこそと見奉り知るに、わざとおほけなき心にしもあられど」(一〇六頁)とあるように、朱雀院の強大な権威を背光としていまはさらに光源氏という六条院最高の主宰者の正妻の地位にあるところの女三宮に対する意識であり(この用例では夕霧の意識に関するものとしての「おほけなし」であるが、柏木にとっても同様であったと見なしてよい)また、「人よりはこまかに思しとどめたる御気色の、あはれになつかしきを、あさましくおほけなきものに、心置かれ奉りては、いかでか目をも見合せ奉らむ」(二〇〇頁)とあるように、源氏を恐れるの「おほけなき」心の認識でもある。

いずれにしても、柏木自身の自覚として、源氏及び女三宮の身分地位を恐れての自責感・被圧迫感があったことは明らかである。柏木におけるこの「おほけなき事」の感覚および認識は、彼が外部世界に対して抱いた、また彼自身を周囲の世界に正統的に位置づけるための、強烈な、しかも妥当な現実認識だったと言うべきであろう。おそらくその認識とは、夕霧と対等に伍して現実を生きてきた手腕家としての柏木、あくまでも皇女を望んでやめ暮しを続ける野心家としての柏木の人間像を、最も基本的に支えるものとなっていたはずである。

私が、柏木の意識にあった「おほけなき事」としての現実認識を

強調する理由は、この認識が、女三宮への恋情によって挫折崩壊の危機に直面することでいつそう強烈な自覚となり、さらに皮肉なことに、この自覚の故にこそ、柏木の宮に対する恋情が、屈折した形でさらに激しく求心化するという逆作用をもたらしていることに注目しているからである。すなわち、女三宮への恋を「おほけなき事」と認識すればこそ、彼は恋情と現実認識の間に苦悶させるを得なかった。彼の内界における両者の葛藤においていずれが勝ちを占めるか——柏木の運命はそこに自ら決定されるべきものであったらう。

三

宮に対する止み難い恋情が、一面において柏木を抑制した「おほけなき事」の明晰な認識に出会うとき、柏木は現実になす術を知らない。彼は、「胸つと塞りて」「いといたく思ひしめり、ややもすれば、花の木に目をつけてながめやる。」(一一二頁)ほか、なすことを知らなくなる。「その夕より、みだり心地かきくらし、あやなく今日はながめくらし侍る」「よそに見て折らぬ歎きはしけれどもなごり恋しき花の夕かげ」(一一六頁)——これらの文脈で、「ながむ」という表現が多用されているが、この「ながめ」る柏木の姿は、彼の人間像を規定する今一つ別の重要な側面である。「ながめ」明かしてもなお鬱積する思いは、そのまま「思ひわぶ」(一二〇頁)「恋ひわぶる」柏木像を形成していくのであって、柏木とは畢竟、「わぶ」る心によって性格づけられる人物でもある。「わぶ」(佻ぶ)とは、再び大言海によれば、「佻、立也、僚、住也、

言憂思失意、住立而不能前也」で、「志ヲ失ヒ、望ヲ絶タレ落魄ス。悲観シテ日ヲ送ル。為ム方ナク差迫リテアリ。思ヒワツラフ」の意と第一に記している。望みを断たれ、失意落胆して為す術を知らず、ただ「ながめ」、「思ひわび」、「恋ひわぶる」情とは、まさしく柏木自身のそれにふさわしい説明である。

「わぶる」人間にとっては行動が失なわれている。しかし、鬱積した情意はなにかよって解き放たれなくてはならない。その極限状況で彼に許容され可能とされる行動はすなわち「ことば」によって思いを述べ晴らすことのみである。「ことば」によって人間が生かされ、人間は「ことば」を生かすことによつてのみ真実なる現実と関わり得る世界が、そこに現在してくるのである。これはまた、極度に高い精神の世界でもあり、抽象的世界でもある。そこでは目に見える肉体と行動は無力な仮象に過ぎない。——これは、文学史の視座から見ると古今和歌集の世界である。換言すれば、柏木が当面している状況とは、すぐれて、「ことば」による新現実の再創造を達成した貴之ほかの古今歌人たちのそれと同じものである。

柏木が宮に送った手紙もほとんど彼の独白に過ぎない。事実、歌に託した柏木の心情歌とは、それが独詠であることによつて独自の生命力を發揮するものとなっている。

さらに注目されるのは、柏木の女三宮との密通という「行動」の問題である。柏木が宮に接近したのは、少くも、はじめは宮の肉体を得んがための行動でなかったことは、密通場面の前後で柏木自身がり返り言っていることである。「ただかくあり難きものの隙に気近き程にて、この心の中に思ふ事のはし、すこし聞こえさせつべく

柏木の人間像について——その愛と死をめぐって——

たばかり給へ。おほけなき心はずべて、よし見給へ、いと恐しければ、思ひ離れて侍り」(一七一頁)、「ただ一言、物越にて聞こえ知らずばかりは、何ばかりの御身のやつれにかはあらむ。神仏にも思ふ事申すは、罪あるわざかは」(一七二頁)、「昔よりおほけなき心の侍りしを、ひたぶるに籠めて止みはべなましかば、心の中に腐して過ぎぬべかりけるを(申略)いろいろに深く思う給へまざるに、せきかねて」(一七四頁)これらは事件前の柏木の会話文の断片である。また事件当時、「ただかばかり思ひつめたる片端聞え知らせて、なかなかかけかけしき事はなくて止みなむと思ひしかど」(一七五頁)と柏木は思量していた。これらの表現を、宮を得るための単なる手段としての虚言と見るべきではないであろう。文面どおり、それは柏木の真意であった。柏木にとつて重要だったのは「ことば」によつて宮との愛の真実を達成することであつて、彼はそれに生命をかけたと言ふべきであろう。そのような柏木であるからこそ、柏木が女三宮に要求したものは「あはれだに」の一語だったのである。「あはれとだに宣はせよ」と、柏木が宮に懇願したものがただ愛の一言であつたことは、再三再四この懇願がくり返され、死期の迫つたとき柏木が宮に書き送った手紙にさえ記されていることから、明白である。柏木にとつて、宮との肉体的密通などは思ひもかけないことであつたのだ。にもかかわらず、現実には肉体的結合が起こつたのである。何故か。

私見によれば、密通とは、柏木にとつて彼自身の世界の滅亡にはかならなかつたのである。柏木は、まさにその時、死に近づきつつあつた、と言うより、死と共にあつたのである。何故なら、その瞬

間、柏木は「おほけなき事」を自覚する理性を放棄し恋の情念に身をまかせることによって決定的に現実を捨てたからでもあるが、より以上に、彼自身が生きることの根拠にしていた「ことば」の世界を破棄して「行動」の世界に突入してしまつたからである。彼にとつて肉体は本来虚像であつて、精神のみが真実であるような世界に柏木は生きていたはずである。それは、柏木の生か死かに関わる重大な問題であつた。

本文にもどつて、今少しその苛烈なドラマの内面を見て行きたい。

四

「余所の思ひやりはいつくしく、物なれて見え奉らむもはづかしくおしはかられ給ふに、ただかばかり思ひつめたる片端聞え知らせて、なかなかかけかけし事はなくて上みなむと思ひしかど、いとさばかり気高うはづかしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見え給ふ御けはひの、あてにいみじく覚ゆることぞ、人に似させ給はざりける。さかしく思ひしづむる心も失せて、いづともいづちもゐて隠し奉りて、わが身も事に経るさまならず、跡絶えて止みなばや、とまで思ひ乱れぬ」(一七五〜六頁)

密通時の柏木の激情を描いた文章である。「余所の思ひやり」で柏木が女三宮に対して抱いていたイメージは「気高うはづかしげ」な宮であつた。朱雀院鐘愛の姫宮で、かつ源氏の正妻である宮は、もつと気品高く威厳を備えた重々しい女性であるはずであつた。この柏木の想像は、前述した「おほけなき事」の認識を生み出す根拠

となつていたのである。柏木は、己が恋を「おほけなき事」と自覚することで、どれほど深い懊悩を経験せねばならなかつたかは既に述べた。ところが現実に見た女三宮は、柏木の予想とはあまりにかけ離れて、「なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見」える、愛らしい女であつた。彼が想像してきたものは、単なる虚偽虚妄の像であつたことを柏木はこのとき知つたのである。宮の柔和な優しい肉体は、ここで一つの象徴である。それは、とりもなおさず、敵めしい権威と華麗を誇る六条院そのものの空虚な実体を暗示するかの如くである。そのことを柏木は本能的に感知したのである。その瞬間、彼をこれまで抑圧し続けてきた「おほけなき事」の認識が影も形もなく消滅したのであつて、代つてその空虚を埋めたものは、静かに燃えていた彼の内なる情念の炎であつた。

しかし、私が重視しているのはそれとは別のものである。問題は柏木の異常な感乱である。「いづちもゐて隠し奉りし、わが身も世に経るさまならず、跡絶えて止みなばや」とは、なんとという「思ひ乱れ」であらうか。この「乱れ」はさらに高潮する。「いと愛しと思ひ聞えて、『さらば不用なめり。身を徒にやはしはてぬ。いと棄て難きによりてこそ、かくまでも待れ。今宵に限り侍りなむ。いみじくなむ。つゆにても御心許し給ふならば、それに代へつるにても棄て侍りなまし』」(一七七頁)。文中「さらば不用なめり」は、その前の文「物さらに言はれ給はねば」を受けた叙述であるが、朝になつても柏木に愛の「ことば」一言も返さない宮に対して、死の悲しみを訴えている柏木の嘆きである。また、「つゆにても御心許し給ふ様ならば、それに代へつるにても棄て侍りなまし」には注釈も必

要であるまいが、露ほどでも愛をかけて下さるなら生命を棄ててその欲びを表わしたい柏木の叫びである。注意すべきは、ここで柏木が語っていることが究極的に死への希求に他ならないことである。愛されない悲しみの故、同時にまた愛される欲びの故に、柏木はますます生命尽き果てても悔いない心境にある。生命がけの愛の告白（求愛）である。おそらく、この場面における柏木の「乱れ」こそ愛する人間の切なさ、悲しき、欲びの極致を十全に表現しているのである。これこそが愛の本体であろうやも知れぬ。

ともかく、ここには、やがて生命死すべき柏木が非常に鮮明に描き出されているのである。彼は既に死とともにある。彼の生はいま真直ぐに死に向けて傾斜している。彼の「乱れ」がそのことを端的に示している。清水文雄先生はつぎのように述べておられる。「この「乱れ」は、やがて世界を滅ぼす激情となつてゆく。「乱れ」が青春の一つの姿であるとすれば、女三宮を得ようと「思ひ乱れ」することも、まがうかたなき青春の姿であつたとせねばならぬ。そして、その先蹤は、かの伊勢物語の主人公の「しのぶのみだれ」にあつたことはいままでもない」^註柏木の「乱れ」に関する見事なご指摘である。

柏木——女三宮物語に関して、「伊勢物語」の影響については既に「河海抄」以来多くの指摘がなされてきているので、いま詳論は省きたい。ただ、私の当面の課題に即して一書を引くなら、かつて唐木順三氏が、業平人間像の根底をなすものを「身をえうなきものに思ひなして」の一点に求めて、自分を無用者として自覚した（無用者であることを選びとった）業平人間像にはじめてひらかれた観

柏木の人間像について——その愛と死をめぐって——

念の世界あるいはみやびの世界は文学史上画期的なものであつたと論ぜられたことは示唆深い。柏木はまぎれもなくその無用者の系譜上に創造された人物として、文学史の観点からも捉えなおされてよい、重要な人物である。

私はさきに、柏木の死の原因を源氏に対する畏怖の念の自己増殖とする通説に触れていた。それは確かに妥当な見解である。しかし死に向かう人間像としての柏木像は、既に女三宮との密通の時点で明確に造型されていたことを知るべきである。柏木はそのときから、死すべき己が運命を選びとっていたのであつて、源氏に対する畏怖恐怖は、そのような柏木の運命の進行を物語る上での単なる一細部に過ぎまい。究極するところ、柏木は女三宮に対する己が愛に殉じて死滅したにはかならないのである。女三宮の美しさのため、また宮の愛しさのため、自らの生命を棄ててそれを全うしようとしたというべき、きわめて抽象的観念的な死である。少くも、柏木自身の意識において、その死は現実的な人間関係の破綻によるものでもあつたにしても、より以上に、そのような社会倫理を超えて、美と愛の極致に達する殉死でもあつたのである。彼の肉体の死は、その苛烈な精神の世界に生起したドラマの残影に過ぎない。

五

柏木の死は、源氏に対する畏怖によるものではないと言えは誤りであろうが、柏木自身、死の床に臨んで住時を回想するとき、「深き過もなきに、見合せ奉りし夕の程より、やがてかき乱り、惑ひそめにし魂の、身にもかへらずなりにしを」（二二八頁）と言つてい

る。彼はここで死に至る愛の軌跡を思い出そうとして、その起点を
かの蹴鞠の夕べの垣間見の瞬間に置いているのである。私は、彼の
死への悲劇的運命を、その密通時における彼の「乱れ」の描写から
考察したのであるが、この叙述からすれば、その垣間見時における
彼の陶酔の瞬間から早くも運命の齒車は動き始めたというのが正確
なのかも知れない。柏木が女三宮の艶姿に魂奪われた瞬間に、彼は
「わぶ」る思いにやがて「乱れ」るべく決定づけられていたのであ
る。美に陶酔することは、現実認識の基礎をなす理性の放棄を意味
すると私は思う。柏木がはじめて女三宮に近づいて思わず理性を失
ない情念に身をゆだねるのも、端的に言えば、宮の美しさに心奪わ
れたからである。

このようにして、美と愛と死に自らの全てを投じていく人間を呼
ぶには、ロマン主義者という言葉が最も適当であろう。ロマン主義
者は、老いや醜悪とは最も遠い存在であり、反現実的であるために
悲劇的である。柏木は典型的なロマン主義者である。

私は、そのようなロマン主義者柏木像を根底において支えるもの
を、「ながめ」る心、「思ひわび、恋ひわぶ」る精神であるととし、
さらに愛故にわが生命を「棄つ」る行動において考察した。ただ忘
れてならないのは、柏木を一方で支えていた「おほけなき事」の確
固たる認識であり、ここに柏木像を形成する相反する二つの理念
があったことが注意されてよいであろう。「わぶ」る精神をロマン
ティシズムの方法によるものと規定するならば、「おほけなき事」
の認識はリアリズムの方法によるものと規定することができる。柏
木自身はロマンティシズムの思想と方法によって造型された人間像

とみてさしつかえないのであるが、源氏物語の作者は、単一の理念
・方法のみで人物の造型や物語の形象化に当ることは殆ど皆無であ
って、柏木の場合においても、一方でリアリズムの視点を失なうこ
とがなかった。それが物語に典型化されたのが、柏木対源氏の対決
の図式にはかならない。そのことを野村精一氏は、「柏木を通して
の浪漫的な源氏批判」とし、さらに「この浪漫的な精神が、散文的な現
実と対決した時、この悲劇が始まる」と説明されている。(注2参
照)

ロマン主義者の終局は死である。源氏に対決した柏木の行きつく
ところは所詮死以外にはなかった。柏木は敗北したかに見える。し
かし、ほんとうの敗北者は源氏である。死によって勝利するという
苛酷な運命を、ロマン主義者は決して避けることはできない。

源氏は敗北を意識しつつ生き長らえ、柏木は勝利を夢想しつつ
悲劇的に死する。——結局、真に勝利した者はだれもない。ただ
この悲劇が最後に残したものは、罪の子としての運命を生涯斗わね
ばならない生命を懐胎して苦しみ嘆く女三宮の、女としての悲しい
宿命の影のみである。

源氏物語の作者が、柏木造型に注いだエネルギーと彼の運命に寄
せた哀惜の感は並一通りのものではない。それは、「若菜」下巻か
ら「柏木」巻に至る本文に明らかに読みとられるところである。お
そらく、作者は、柏木という全く新しい型の人物造型を経て、さら
に人間存在に関する新しい課題を自らに課していったのであろう。

ともあれ、柏木は真のロマン主義者としての悲劇を生き死にした
人間である。

(付記) 愛すればこそ死ななければならなかった柏木は、以前から私を惹きつける人物であった。それがあつた強い感動を伴って私を圧倒しはじめたのは、昨、昭和四十五年十一月のことである。その頃、私は「若菜」巻における悲劇について、女三宮に焦点を合わせての拙稿を公表していた。本誌前号の「若菜」巻についての一考察がそれである。宮の現実的側面に力点を置いたため柏木にとって虚像でしかなかった宮の一面を過小視した嫌いがあつて、再考の要を感じていた。後日、深沢三千男氏から懇切なご批判のお手紙をいただいたのを機に、今度は柏木を中心に「若菜」巻の再論を試みた。

本稿は、前稿への若干の補正ともなすべきささやかな試論であることを付記する。

(昭和四十六年十月)

- 注1 石田籙二氏「柏木の死について——悲劇的なるもの——」
〔国語と国文学〕(昭28・9)
- 注2 石田氏(注1に同じ)。野村精一氏「若菜巻試論——人間関係の悲劇的構造について——」〔国語と国文学〕(昭35・3)
深沢三千男氏「女三宮物語の基本構造」〔国語国文〕(昭39・10)
- 注3 注1に同じ。
- 注4 注2の野村氏のご論文。
- 注5 注2の深沢氏のご論文。
- 注6 篠原昭二氏「柏木の情念」〔源氏物語講座〕(有精堂刊)第四卷(昭46・8)所収)によると、源氏物語の「おほけなし」の用例は、二九例あり、そのうち一一例は単純な身分不相

柏木の間像について——その愛と死をめぐって——

- 注7 応の意味で、残り一八例は、許されない男女の密通の意味であるとされ、柏木の恋に関する十一例はすべて後者の意味に用いられていると分析されている。許されない男女の密通というの、その根本は身分不相応な恋という前提に立つての用法であるから、前者の意味に統一してもさほど重大な支障はないように私には考えられる。
- 古今和歌集仮名序に「ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、もに見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ、おとこをむなのなかをもやはらげ、たけきもののふの心をも、なぐさむるはうたなり」とある。
- 清水文雄氏「源氏物語の男性論」〔源氏物語講座〕(前出、第五卷(昭46・9)所収)
- 注8 唐木順三氏「無用者の系譜」(筑摩書房刊、昭29・4初版)「国文学解釈と鑑賞」昭和46年11月号で「昭和のロマン主義」を特集しているが、対象とした作家作品はちがっても、これに多くの示唆を得た。
- 注9 前出の石田氏(注1)や清水氏(注8)のご論文に、柏木がこの物語で全く新しい人物であることが指摘されている。第三部との関連性が当然問題となるが、本稿では触れ得なかった。また、柏木造型をめぐってしばしば問題になるのは、第一部での柏木像の第二部に至る急激な変貌であるが、縦の時間的推移における人物像の変化の問題に加えて、人物の造型に共時的に現われる二つの方法——リアリズムとロマンティズム——に注目する視点も重要であろうかと思う。